

# 雪の厳しさを学ぶ体験型ツーリズム事業案

関西大学社会安全学部行政学研究会

代表者：黒川あかり

発表者：吉田大輝

その他参加者：寺塩将一、川辺智士、龍田一喜、阪口拓哉、影山秀之

## 概要

本事業案では、津南町において、雪の楽しさのみならず、雪の大変さと、更に防災教育を体験学習できる観光事業案を提案したい。そして、学生の団体客や外国人観光客の獲得を目指したい。本事業案は、2つの大きな柱からなる。①雪の楽しさと大変さの体験ツアーと、②防災教育体験ツアーである。まず、雪の楽しさと大変さの体験ツアーは、雪のメリットのみならずデメリットの両面を経験できる、体験型ツアーである。防災教育体験型事業は、雪災害・事故が時々発生する津南町において、防災教育プログラムを体験して貰おうという事業である。

具体的には、①雪の楽しさと大変さの体験ツアーは、更に、a 雪の楽しさ体験ツアーと、b 雪の大変さ体験ツアーの2つの中柱からなる。a 雪の楽しさ体験ツアーは、従来型のウィンタースポーツや雪遊びを、幅広い層にしてもらうための環境整備を提案したい。また、b 雪の大変さ体験ツアーは、文字通り、雪国の日常生活の大変さを経験して貰おうというもので、雪の中での朝の通学・通勤を体験してもらったり、雪かきや雪下ろしという重労働体験をしてもらったり、アイスバーン等のある雪道ドライブを観光タクシー等で経験して貰い、雪道の運転が如何に注意を要するか学びというものである。また、ホワイトアウトの体験もしてもらう。

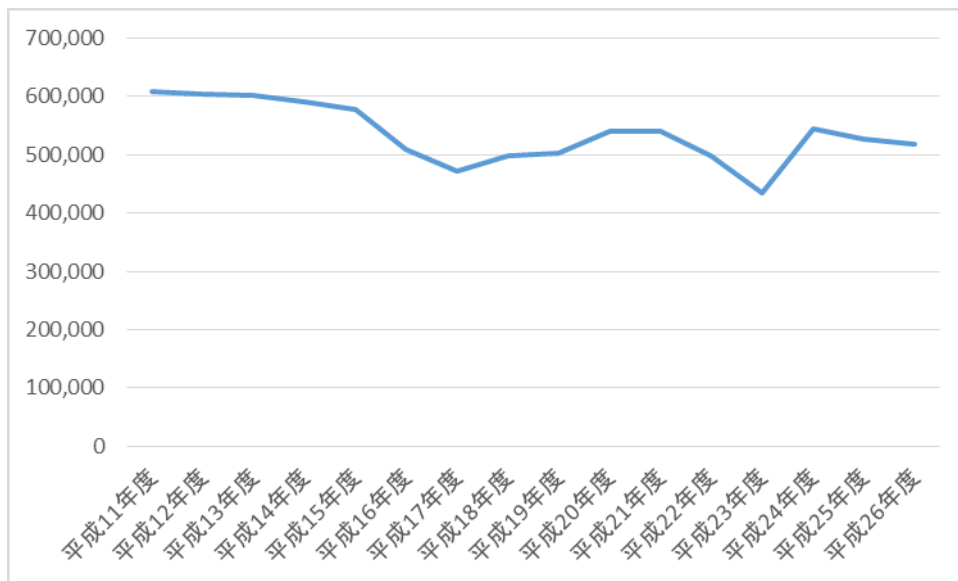
②防災教育体験ツアーは、雪災害が多い、津南町の地域的特性を生かし、今後同じような災害が発生した場合、どのように対応すべきか、図上演習での防災教育（防災グループワーク、HAG、クロスロード等）で学ぶというものである。

これらの事業により、中高の学生団体客や、外国人観光客の誘致が可能である。

1. 問題の所在

津南町は、多くの観光資源を持った町である。四季豊かな自然、水、食、そして雪。ただ、平成 16 年の新潟県中越地震、平成 19 年の新潟県中越沖地震、平成 23 年の長野県北部地震といった、度重なる地震の影響で、ここ 15 年間（平成 11 年～26 年）で、観光客数は減少傾向にある（図表 1）。平成 11 年度の 60 万 9300 人から、平成 26 年度は 51 万 8010 人で、年間観光客数が約 9 万人減っている。更に、宿泊を伴う観光客数は、地震前が 12.1 万人(平成 21 年度)、地震直後が 7.8 万人(平成 23 年度)、現在 8.6 万人(平成 26 年度)とまだまだ回復途上である（注 1）。

図表 1 津南町への観光客数の時系列的变化

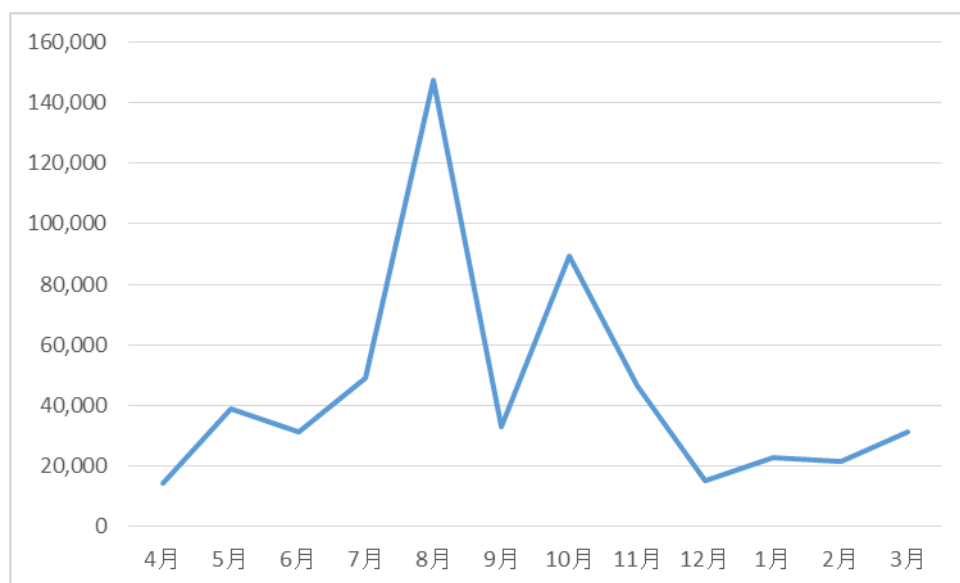


備考：津南町 HP 地域振興課資料より作成

<http://www.town.tsunan.niigata.jp/soshiki/somu/kanko.html>（2016 年 9 月 11 日確認）

また図 2 は、平成 20 年度の月ごとの津南町への観光客数を見たものである。これを見ると、8 月と 10 月にピークがあり、その狭間の 9 月と、12 月から 4 月までが、入込客数は低調であることが分かる。一方、収容人数 529 人と、宿泊施設が必ずしも多くない津南町において、観光の中核施設である N G P 津南は、「夏と冬は相応な入込みだが、春と秋が課題という（注 2）」冬も、ある程度の入込客を確保できるのは、スキー場と温泉がある所為であると思われる。

図 2 津南町への月別観光客数



備考：新潟県資料「市町村別観光客入込数（平成 20 年度）」より作成

町全体としては、春や秋、更には冬といった閑散期にも、如何に観光客を獲得できるかというのが、大きな課題となってくる。NGP津南を経営する、株式会社津南高原開発の加藤正夫社長によると、例えば秋に関しては、「単に新緑や紅葉だけでは、なかなか誘客に結び付かない。秋の紅葉時期を合わせ、企業では上半期から下半期に移る時期。社員旅行や研修シーズンであり、こうした要素を加えた商品提供など、恵まれた自然プラスアルファの営業が必要（注 3）」と指摘している。逆に言えば、個人客とは異なり、安定した客数が保障される団体客の獲得で、津南町が苦戦しているということを意味している。また、津南町の地域再生計画「地域資源を活用した苗場山麓観光交流計画」を見る限り、インバウンドの取り込み強化も、始まったばかりである。

津南町が豪雪地帯であるという、地域的特性も生かしつつ、冬のみならず通年で、団体客、外国人観光客を獲得可能なプランとして、「雪の厳しさを学ぶ体験型ツーリズム事業案」を提示したい。

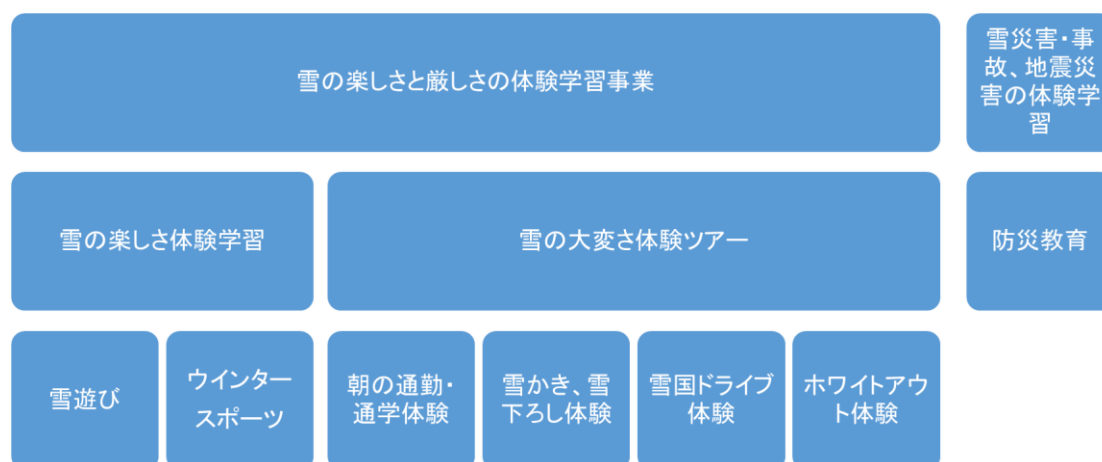
## 2. 雪の厳しさを学ぶ体験型ツーリズム事業案の全体像

現在、日本の国内旅行や団体旅行、またインバウンドによる外国人観光客の旅行に変革が起きている。国内旅行に目を向けてみれば、LCCの発着がある空港は、遠隔地からの旅行者等が増している一方、津南町から離れており、JRも単線鉄道のみという地域は、なかなかスポットライトは当たりづらい。津南町では、既存の試みとして、自然体験で小中学校団体旅行の呼び込み等をしているが、国土の4分の3が森林でおおわれたわが国では、それのみでは、他地域からの差別化は難しい。また近年、海外からの観光客を呼込もうとする「インバウンド」が行われ、外国人観光客が各国から押し寄せている。本関西大学行政

学研究会のある、大阪でもその恩恵は受けている。主に中国人観光客による「爆買い」ビジネスは、円高の進行、中国経済の減速、更には中国当局の国外消費に対する規制の影響で、電化製品や時計等、高級品の大量購入は減少傾向にある。そのため、「爆買い」ビジネスの終焉によって、閉店する百貨店も増加している。しかし、単に円高や中国経済の減速、当局の規制強化のせいで「爆買い」が終焉していったのか、それはまた別の事情があるとみられる。「インバウンド」の消費行動の変化がこの「爆買い」ビジネスに影響を与えたのではないかとされている。「インバウンド」の購入頻度の高い品目では、帰国後に商品のリピーター客となって、母国での購入が増加している。つまり、「モノ」は母国では購入できるからわざわざ、日本に来て購入する必要はないということで、日本国内での購入が減っているのである。ということである。そこで、必然的に「インバウンド」が日本に来てフォーカスするところは、「モノ」から「サービス」に移りつつあるとされている。まさに、「モノ」を売りつけるだけの「mono」なビジネスから、多様化した「サービス」へ舵をきったということである。津南町にも、ビジネスチャンスがあると考え。新たに商品開発を行うのではなく、いまあるものを発想の転換で売り込むのである。更に、今の時代は広告業界ではインターネットを使った戦略に移行しており、安価な宣伝費だけで済むようになる。そこで、体験型のツーリズムを、この津南町に当て嵌める。

図3は、「雪の厳しさを学ぶ体験型ツーリズム事業案」の全体像を図式化したものである。

図3 雪の厳しさを学ぶ体験型ツーリズム事業案の全体像



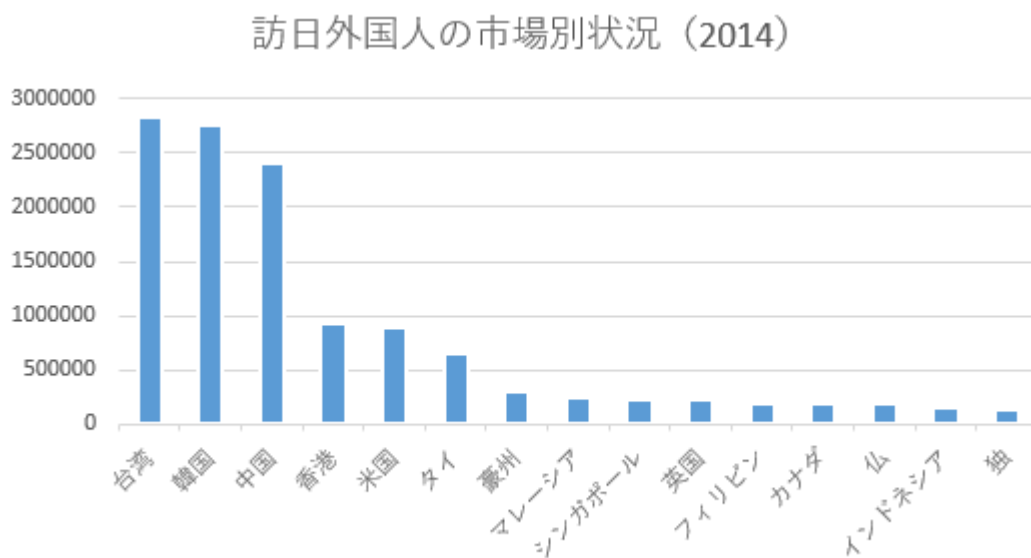
本定義に基づき、津南町において、雪の楽しさのみならず、雪の大変さと、更に防災教育を体験学習できる観光事業案を提案したい。そして、学生の団体客や外国人観光客の獲得を目指したい。本事業案は、2つの大きな柱からなる。雪の楽しさと大変さの体験ツアーと、防災教育体験ツアーである。まず、雪の楽しさと大変さの体験ツアーは、雪のメリットのみならずデメリットの両面を経験できる、体験型ツアーである。防災教育体験型事業は、雪災害・事故が時々発生する津南町において、防災教育プログラムを体験して貰おうという事業である。以下で、詳細について説明を行いたい。

### 3. 雪の楽しさと大変さの体験学習事業

#### (1) 雪の楽しさと大変さの体験学習事業とは

津南町は、豪雪地帯である。地域住民は、代々雪と共に共生してきた。雪の美しさや楽しさというプラス面のみならず、雪国で暮らす厳しさ、怖さ、大変さという雪のマイナス面を知り尽くしている。津南町の住民にとっては、日常的で大変とは思わないことでも、観光客にとっては、新鮮な観光資源である。雪の厳しさを知ってこそ、本当の意味での雪の素晴らしさを分かるはずである。本事業案は、①雪の楽しさ体験と、②雪国大変さ体験ツアーの2つの柱からなる。まず、雪の楽しさを体験してもらうという、基本的には従来型の雪遊び、ウィンタースポーツを体験してもらおうというものである。津南町の隣の湯沢町でも、実際に雪の降らない東南アジアの観光客向けに雪に触れてもらおうといった取り組みも行われている。

図4 日本を訪れる訪日外国人の国別の状況



PRESSRELEASE (報道発表資料)日本政府観光局 (JNTO) 平成 28 年 1 月 19 日付  
より作成 [http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data\\_info\\_listing/pdf/160119\\_monthly.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/160119_monthly.pdf)

図4を見て分かる通り、インバウンドによる外国人観光客の大半は、雪の降らない東南アジア諸国や台湾、香港等の地域からきていることがわかる。そのため、雪については高い関心を示す傾向がある。そこで先ほど述べた体験型のツーリズムを行うことが重要なのである。

#### (2) 雪の楽しさツアー

近年、日本の粉雪（パウダースノー）の質が、世界的に高い評価を受け、ジャパンとパウダースノーを掛け合わせて、「ジャパウ」という造語が、よく使われるようになった。そり遊び、かまくら、雪ダルマ作り等の雪遊びや、スノーボードやスキー等のウィンタースポーツを通して、ジャパウの楽しさを思う存分、体験してもらおうというものである。ジャパウ試食会は、きれいなジャパウを用いたアイスクリームや、シャーベット、かき氷を味わってもらおうというものである。そもそも私たちの目標は、ここ新潟津南に観光客を呼び込み、発展させることである。1回きりではなく、「次も来たい」と思っただけのためには、やはりジャパウを最大限に活用させることではないだろうか。

ただ単にスキー、スノーボード場を設けただけでは、他と変わらないため、そんなに集客率の増大は望めないだろう。しかし、大型スーパーやテーマパークのようなハコモノは費用が重なるため、現実的ではない。低コストで、ジャパウを活用し、他のスキー場と差別化させることが重要となってくる。

スキーやスノーボードは、子供から大人まで楽しめ、自然豊かな場所で遊べる素晴らしいスポーツであるため、中学・高校の修学旅行先によく選ばれる。一方で、体がまだしっかりできあがっていない幼児や、体が弱ってきた高齢の方はスキー・スノーボード等を楽しむことは難しいのではないだろうか。また、高い場所が苦手であったり、体に何らかの障害を持っておられる方であっても同様であり、スキー・スノーボードだけではなく、雪遊びをしたい修学旅行生もいることだろう。上記のような観光客は、おそらくスキー場へは行かないだろう。

そこで、“子供から大人”だけでなく、“すべての人”が楽しむことを可能にするために、スキー場と雪遊び場所を合同にすれば、すべての人がジャパウの楽しさを実感してくれるのではと考える。一見、どこにでもあるような発想であると感じるかもしれないが、確かにスキーに雪遊び場所があることは珍しくはない。しかし、その多くはファミリーゲレンデといって、子供と保護者が一緒にそりや勾配が急でなく安全なところでスキーの練習や雪遊びをする場所となっている。つまり、子供用という意識から、一般客で雪遊びをしたくてもなかなか足を踏み込みにくいのではないだろうか。では、老若男女問わず、誰でも気軽に遊べるようにするためには、どうしたらよいだろうか。

先程述べたスキー場と雪遊び場所を合同にし、スキーやスノーボードと同じように、雪遊びのインストラクターを、津南町のボランティアで賄ったりし、ジャパウならではの新たな雪遊びの開発や、我々が知っている雪遊び（雪合戦や雪だるま作りなど）をより高度に深く突き詰めることで、子供用という意識をなくし、誰もが気軽に遊べる雪遊び場所となるのである。スポーツとしての雪合戦大会や、雪や氷のアート作成教室等なら、大人も楽しめる。

### （3）雪の大変さ体験ツアー

#### ① 雪の大変さ体験ツアーとは

近年、外国人の体験型教育ツーリズムが注目されていることは既に述べたが、そこで外国人と学生をターゲットとし、日本の文化を知ってもらうための体験学習ツアーを提案す

る。「雪国の大変さ体験ツアー」は、雪の楽しさと厳しさの体験学習事業の、最も核となる部分である。文字通り、雪国の日常生活の大変さを経験して貰おうというもので、雪の中での朝の通学・通勤を体験してもらったり、雪かきや雪下ろしという重労働体験をしてもらったり、アイスバーン等のある雪道ドライブを観光タクシー等で経験して貰い、雪道の運転が如何に注意を要するか学びというものである。また、ホワイトアウトの体験もしてもらう。なお、雪下ろしやホワイトアウト体験は、ガイドの安全管理体制下で必ず行うものとする。これらは、津南町の住民にとっては、慣れた当り前のことで、別に大変と思わないかもしれないが、観光客にとっては大変なことで、且つ新鮮な体験ができる観光資源である。

## ② 朝の通学・通勤体験

雪が降らない地域では何気ない通勤通学でも、雪国では大変であることを体験してもらうことが目的である。多くの雪を知らない体験者は雪道の歩き方や靴の選び方までも現地の方がインストラクターとしてレクチャーをする。例えば、できるだけ歩幅を小さくして歩くことや足の裏全体を使って歩くことなどレクチャーする。靴の選び方もどのような靴が雪道を歩きやすいかをレクチャーすることで、雪道を少しでも安全に歩行できるようになる。実際に、歩きにくい靴と歩きやすい靴を両方試すことで、靴によってどれだけ滑りやすさが違うのかを体験することも可能である。また、津南市を歩くことで体験者に津南市の日常や景観を見てもらうことも可能である。ただ、リスクとしては雪道を歩行しているときに転び、ケガをする可能性があることだ。いくら入念に歩き方や適切な靴で歩いたとしてもなれない雪道を歩くことは困難を極める。踏み固められていない道かつ平地で体験してもらいできるだけリスクを減らすことが重要である。

## ③ 雪かき、雪下ろし体験

雪国でも毎年苦勞するのが雪かき、雪下ろしである。だが、雪が降らない地域では雪かきや雪下ろしをする必要がない。そのため、雪かきや雪下ろし未経験者がほとんどである。これら観光客に、雪かき、雪下ろしの大変さを知ってもらうことが、この体験の目的である。インストラクターの方が雪かきのコツなどをレクチャーしてから雪かきをしてもらう。最初から、これら観光客に、雪下ろしを体験してもらうのは危険である。はじめのうちは雪かきをしてもらい、上手かった人や余裕がある人には、特別に雪下ろしをレクチャーし体験してもらう。雪下ろしは、毎年命を落とす事故もあり、体験時には細心の注意が必要である。レクチャー内容は、使用道具の特徴や雪かき時の体制など、基礎の部分である。雪下ろし雪かき共通の危険性は、体験者の腰の負担である。体験者が無理な体勢で雪かきをしていないかなどを、インストラクターなどが逐次監視する必要がある。雪下ろしは、ボランティアとして、雪下ろしが困難なお年寄りの家の雪下ろしをしてもよいが、多くの体験者が未経験者であることを考慮すると、疑似的な体験ができる場を設置し、そこで体験するほうが落下のリスクを減らすことができる。例えば、屋根だけを設置するなどがある。ボランティアの雪下ろしは、別に募集したほうが賢明である。



#### ④ ホワイトアウト体験

ホワイトアウトとは、雪などによって起こる気象現象であり、あたり一面が雪で真っ白となり方角、高度、地形の把握が困難となる事がある。2013年には、北海道で死者も出ており、非常に危険な現象である。雪国の大変さ体験ということでホワイトアウトを体験してもらうわけであるが、勿論危険を伴う為、徹底した安全管理が必要である。

ホワイトアウトはあくまで自然現象であるため、体験してもらうには安定性が見込めないとされる。そこで提案するのが、人工降雪機を利用して、人工的にホワイトアウトを再現するというものである。予算がかかるという問題点はあるが、安定して体験学習を行える手段である。

#### ⑤ 雪道ドライブ体験

近年科学技術の進歩もあり、性能の良いスタッドレスタイヤが開発されている。しかしそれでも雪道では滑ることがあるので車の限界を知るという意味で、安全な施設を使っての体験学習を行う事業案を提案したい。普段は雪の降らない都市部に住む人も、ウィンタースポーツなどを楽しむために、雪道を走ることがある為、雪道の危険性を知ってもらうことは非常に重要である。

具体的な実施方法としては、公道で行うことは不可能なので、まずは交通安全研修所を設置する。高校生までのスタディーツアー客に対しては、運転が出来ないのでインストラクターが運転する自動車に3名ずつ程で同乗してもらい、危険性を学んでもらう。免許を持った大学生、社会人に対しては実際に運転をしてもらう。行う内容としては、ノーマルタイヤとスタッドレス、チェーンを巻いたタイヤでの乗り比べ、アクセルワーク、駆動方式の違い、ABS装置の効果などを体験してもらう。

### 4. 防災教育体験事業

次に、防災教育体験事業は、雪災害・事故、地震災害の体験学習である。津南町は豪雪地帯で、新潟県の除雪費の約4分の1は、津南町と十日町で使われる。雪災害は、不可避な地域である。平成18年にも、国道405号・秋山郷の 国道405号・秋山郷の雪崩危険による通行止めで、集落孤立が発生した。津南町では、5集落 69世帯 199人が孤立状態を強いられた。このような「被災」というマイナスイメージを「被災した、している、だからこそ学べることもある」というプラスイメージへ変える発想で、この被災経験を、他地域と差別化を図る貴重な観光資源と考え、雪国の大変さ体験ツアーなどと合わせて、防災教育の体験学習を行い、更に今後同じような悲劇を起こさないようにするためにはどうすればよいのか、地域での防災意識を高め観光客と意見交換し互いの理解を深めるような、図上演習での防災教育（防災グループワーク、HAG、クロスロード等）を行うというものである。

具体的な案としては、最初に雪の大変さ体験ツアーを行い、雪の大変さを理解して貰っ

た上で、災害や事故に備えての図上演習を用いた防災教育を行う。ここでは、防災グループワーク、HAG、クロスロードという例を挙げた。この3つにはそれぞれ利点がある。防災グループワークにはグループで議論し、一般市民が防災を考えるとっかかりに適した方法である。HAGは、グループになるものの避難所の開設、運営側になり、的確かつ迅速な対応や公助の重要性が学べる。クロスロードは、災害時の様々なジレンマを抱えた状況を疑似体験できる。訪れる学校の学年や、観光客の年齢によって柔軟に内容を変えていく。防災教育は、近年地震の頻発や異常気象に伴い学校教育の現場でも、現在求められているものである。しかし、過去の災害経験の有無などにより、地域によってどの程度防災教育が進められているかには差がある。そこで、学校の団体旅行を、防災教育の場にできるといふことをアピールする。もちろん、住んでいる地域の災害の特徴にそう、防災教育が必要であるため津南町で防災教育を行って意味があるのかという意見も考えられる。しかし、あえて他の地域の防災に触れることにより、ここでの防災教育から得た学びを自分自身の中で消化し、「では、自分たちの住んでいる地域ではどうなのか。この部分は参考になるのではないか。」というように帰った後、自分が住んでいる地域の防災を再び考える。といった事後学習により、更なる学びを得ることができると考える。また、海外には、雪災害や地震災害のほとんどがない地域がたくさんある。例えば、台湾では雪は降らず、雪を見たことすらないという人がたくさんいる。香港では、地震は起こらない。ヨーロッパでは、イタリアのように地震が起きる地域もあるが、河川氾濫対策に重点を置いている国々が多い。そういう層に、強くアピール可能である。さらに、本事業を行うにあたり、「津南町自身の防災」を再認識することができ、他の地域の人と意見を交換することにより新たな発想が生まれると考えられる。そのため津南町の地域の防災力向上という利点もあると考える。

## 5. おわりに

このように、本事業案は、津南町の良い部分のみならず、マイナス面も観光資源とし、津南町の魅力に変え、それで観光客を津南に呼び込もうとする事業案である。本事業案の特徴は、発想の転換と切り口勝負なので、そこまで新たな予算が必要ないということである。施設等のハード面の新設等は、必要ない。あくまでソフト重視の事業案である。担当部署としては、地域振興課を想定している。

### 引用・参考文献

注1 津南町 HP 地域振興課資料

<http://www.town.tsunan.niigata.jp/soshiki/somu/kanko.html> (2016年9月11日確認)

注2 津南新聞 2015年7月3日号より引用

注3 同上

図4 PRESSRELEASE (報道発表資料)日本政府観光局 (JNTO) 平成28年1月19日付

[http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data\\_info\\_listing/pdf/160119\\_monthly.pdf](http://www.jnto.go.jp/jpn/statistics/data_info_listing/pdf/160119_monthly.pdf)

・自然災害地における「負の遺産」の観光マネジメントに関する研究：中国四川省「北川地震遺跡区」を事例として 著：王金偉 (P87より引用)

・ダークツーリズムの視角からみたジオパーク，ジオツーリズムの可能性 著：鈴木晃志  
郎

(P75 より引用)

・インバウンド需要の変調 Research Eye No.2016-011 2016年6月13日  
著：日本総研

災害救援ボランティア推進委員会 第13回防災教育のすすめ ～命を守る防災教育の考  
え方と実践実例 前編～

<http://www.saigai.or.jp/info/2014/0709161005.html> (9月14日アクセス確認)

防災士教本 特定非営利活動法人 日本防災士機構 平成27年8月1日